

日本の山地に形成された入峰道(行者道)の歴史地理的予察

長野 寛

まえがき

平安時代の「法華験記」(長久年間一〇四〇—四四年、景戒著)によれば、熊野山から大峰に入り、路に迷いながら十余日を費して吉野の金峰山みまたけに至り、そこで山籠る聖の靈験を体験した沙門義審ぎえいのことが述べてある。これは凡そ一千年を経た現在まで踏襲している紀伊半島縦断の、通称一五〇キロに及ぶ山の道・修行の道が確かに存在した記録の初見である。

山岳信仰を母胎とする修験道の代表的な修行である「入峰」とは「大峰入り」の略称と解釈されている。大峰入りとは祖霊の籠る大菩提峰に入り、必死の覚悟で十界修行を重ね、神仏の靈験を駆使することの可能な修験(山伏)として再生し、衆生を濟度するという意識で実践されたことを、日本大藏經・修験道章疏の諸文献によって窺い知る。修験道では、山岳の岩窟に籠ったり、社寺に寄寓する行者が、その所属の山や社寺を離れ、紀伊半島の大峰山系を最も重要な修行の根本道場としたところに特徴がある。すなわち熊野から吉野に至る大峰山系を曼荼羅と観想し、吉野の

金峰山は大日如来の堅固な智徳で一切の煩惱を摧破する金剛界の拠点道場、熊野は大日如来の宏大無辺な慈悲で母胎のように一切の生命を育くむ胎藏界の拠点道場として、両者の間を山籠と踏破を交え、厳しい修行を重ねながら結合した。これは胎金合一・陰陽和合して新しい生命力として山中に宿し、靈験功徳の能力を備えた即身成仏の修験者に再生する目的で大峰入りを行ったことになる。なお、峰入りの始まりは駈入、終りを出峰と称する故か、この修行は「みねいり」と呼称しながら「入峰」と表現する例が多い。

後白河法皇の撰（一一七九年?）、「梁塵秘抄」には、「四方の靈験所は、伊豆の走湯、信濃の戸隠、駿河の富士の山、伯耆の大山、丹後の成相とか、土佐の室生戸、讃岐の志度の道場とこそきけ」とあるのをはじめ、数多くの修験道の靈山や山伏の厳しい修行ぶりが語われている。このなような靈験所の中から吉野―大峰山―熊野の行場にならない、金剛界・胎藏界の山として位置付けられるものが全国各地に続出し、「宿」を伴う入峰の道が山岳地帯に定着するようになる。その最盛期は中世と考えられる。幕藩体制の束縛を受けた近世には、入峰儀礼の派手な形式化に伴う祭費の増大や、入峰コースの簡略化などが行われている。それでもなお明治維新の神仏分離令、同五年の修験宗廃止令までは各地の山岳に入峰は盛んに実施されていた。

九州英彦山の山伏集団も中世・近世を通して約五百年間は春・夏・秋三季の入峰を行ったことが記録から確認できる。しかし神仏分離以後、断絶して既に一世紀、入峰の道は全く人の通る気配はない。その一部を探索してみるとブナ帯の下草（笹）の中に、か細いが確かな道が続いており、自然の岩窟を利用した「宿」の跡は、数十人が起臥するに必要な広さをもっていた。修験道の入峰と一脈通じる一千年の伝統をもった比叡山回峰行の山道を随行してみると、深夜から早曉にかけて山中を野鳥のように敏捷に駆け巡る行者によって、地形図にもない行者道が踏み固められ

ている。

日本の山地には、宿を伴った道が修験道の山を拠点に形成されていたことに注目したい。宿の宗教的な意味は古代インド天文法の宿曜を神の住所としたことにあるが、現実には宿泊可能な施設としても存在した。そして信仰の山には狩猟民と係わりをもつ開山伝説の多いことや、入峰・回峰行の儀礼に注意すると、古代或は先史時代からの山人の道が宗教の道として踏襲されているのではないかと思われる点がある⁽¹⁾。修験道の中でも入峰に関する資料は特に少ない。したがって本論でも、比較的多くの資料を検討した英彦山(享保十四年以前は彦山と記された)の例を中心に、入峰道の形態、入峰集団の構造、入峰の財源などをかろうじて把握できたにすぎない。論題も「予察」とせざるを得なかった所以である。

一、入峰道の形態

まだ熟考の余地を多く残しているが、入峰道とは『修験道に帰依した行者(山伏・修験)の集団が主体となり、修行を目的に、金剛界と胎藏界の山を想定し、相互の山を往来することによって形成された、宿を伴う道』と表現される。国土面積の七五%を山地・丘陵で占めるわが国では、至るところに信仰の対象となった山が存在する。そのこととは山名・寺社の存在・記録・伝承等によって指摘が可能であるが、連続的に多くの山々を修行の場として巡歴する入峰については祕儀口伝の類が多く、記録の少ないことから修験道の中でも特に研究困難の分野である⁽²⁾。ここでは宗教儀礼としての入峰を考察するのではなく、伝統的な入峰によって形成された道についてその概要を述べる。

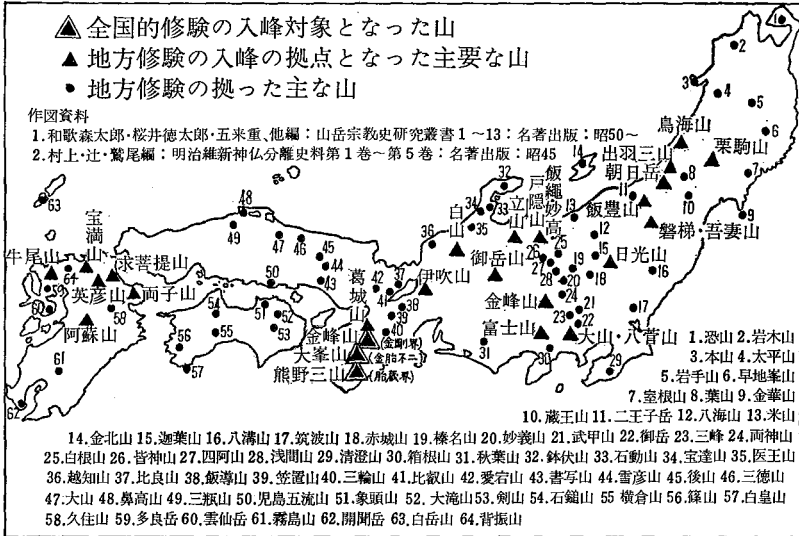


図1 入峰の行なわれた山岳

(一) 入峰道の起点と終点

鎌倉時代には各地に散在する熊野を根拠とする山伏（山臥）達と、吉野金峰山を根拠とする山伏達はそれぞれ連絡融通して組織化が進み、室町時代から天台系修験は聖護院のもとに組織化されて本山派と称し、胎蔵界熊野から大峰山をへて金剛界吉野（金峰山）に至る「順峰」とよばれる入峯を行った。これに対して真言系修験は三宝山のもとに組織化されて当山派と称し、金剛界吉野から大峰山を経て胎蔵界熊野に至る「逆峰」のコースを選んだ⁽³⁾。いずれにしても吉野と熊野が入峰道の起点であると共に終点ともなった。このような形態をモデルとする入峰の道は全国各地に分布する地方修験道の山に取入れられ、金剛界や胎蔵界の拠点となったところには、社・寺・窟に奉仕する行者の坊舎が建ち、登拝する一般信者の宿泊にも供されるようになり、山岳宗教集落を形成した場合が多い。逆説的に見れば入峰道の起点・終点となることは、修験道の拠点として大きな信仰圏を背景に持つ山ということになる。熊野

(胎蔵界)―大峰山(金胎合一)―吉野(金剛界)、羽黒山(胎蔵界)―湯殿山(金胎)―月山(金剛界)、彦山(胎蔵界)―宝満山(金剛界)、背振山(胎蔵界)―多良岳(金剛界)等、各地にこのような曼荼羅の山岳が形成されたと推察される。この金剛界と胎蔵界の間を結ぶ入峰の道は、神仏分離以後僅か一世紀を経た現在、忘却された部分の方が多(い)も。図1はそのような視点から、修験道の拠点すなわち入峰道の拠点となった山を概観したものである。

(二) 社堂・窟などを利用した宿

山岳に形成された行者道として、入峯と多少の脈絡をもつものに「回峰行」の道がある。現在には比叡山にその伝統が続いており、断絶していた日光輪王寺でも一部の道は修行が復活している。中世・近世には彦山や求菩提山くぼてきざんでも行われていた古文書や碑伝のあることから、入峰と同様に各地の山岳寺院で実行されていたようである。比叡山で踏襲されている千日回峰行は、八カ年かけて成就する厳しい行であるが、最も初歩的な百日回峰行の場合でも百カ日連続して、深夜に単独で無動寺を出発、暗黒の急坂な行者道を提灯一つで延暦寺本堂に上り、山嶺を横川よがわに進む途中で東の空から明けてくる。さらに急斜面を日吉山王社に下り、坂本を通過して再び急坂を無動寺に戻る。この間二百数十カ所の神社・堂塔・靈木・靈石の類を巡拝しながら、約三〇キロを不休不食の修行として約六時間で踏破する。したがって宿泊は無動寺以外に必要はない。

これに対して入峰は集団で行動するから拠点となる胎蔵界や金剛界の山中、或は登拝口には宿坊の集落が形成される。また彦山から宝満山への入峰でも、往復約一五〇キロの距離を山籠しながら一カ月以上かけての修行であるから、途中に宿泊する所が必要となる。その「宿」は信仰の対象となる社堂を主に、石窟や大峰山の小篠宿のように山中の宿坊集落のこともあった。これが「大峰山七十五ななひゃくご窟」・「彦山四十八宿」・「葛城二十八宿」などといわれる例で

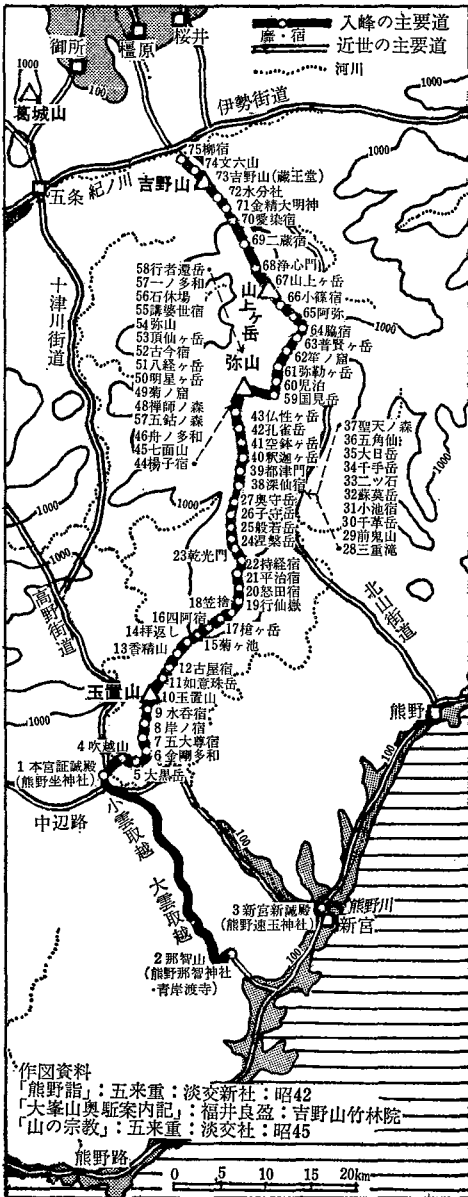


図2 大峰山75驛と入峰道推定図

ある。ただし総ての宿に泊るわけではなく単に巡拝して通過する宿と、実際に山籠る宿に分化していったようである。また近世の阿蘇修験の入峰は五十年前に一度、四〇―五〇人くらいの集団で行うことが多く、山中の宿には村人の奉仕による小屋掛がなされたところもある。里道を行くときには庄屋や村人の家に宿泊することもあった(6)。

宿の配置は、山籠修行をする入峰拠点の山には密に分布するが、拠点の山から離れた山道に沿っては、大峰山も彦山も約二キロに一カ所程度である。山中の宿として選定される場所は、英彦山大南宿や籠水宿の場合から考察すると巨岩やオーバーハングした岩壁のある地形、日照がよく、風当りの少ない気象条件の位置、關伽水と飲水の得られると

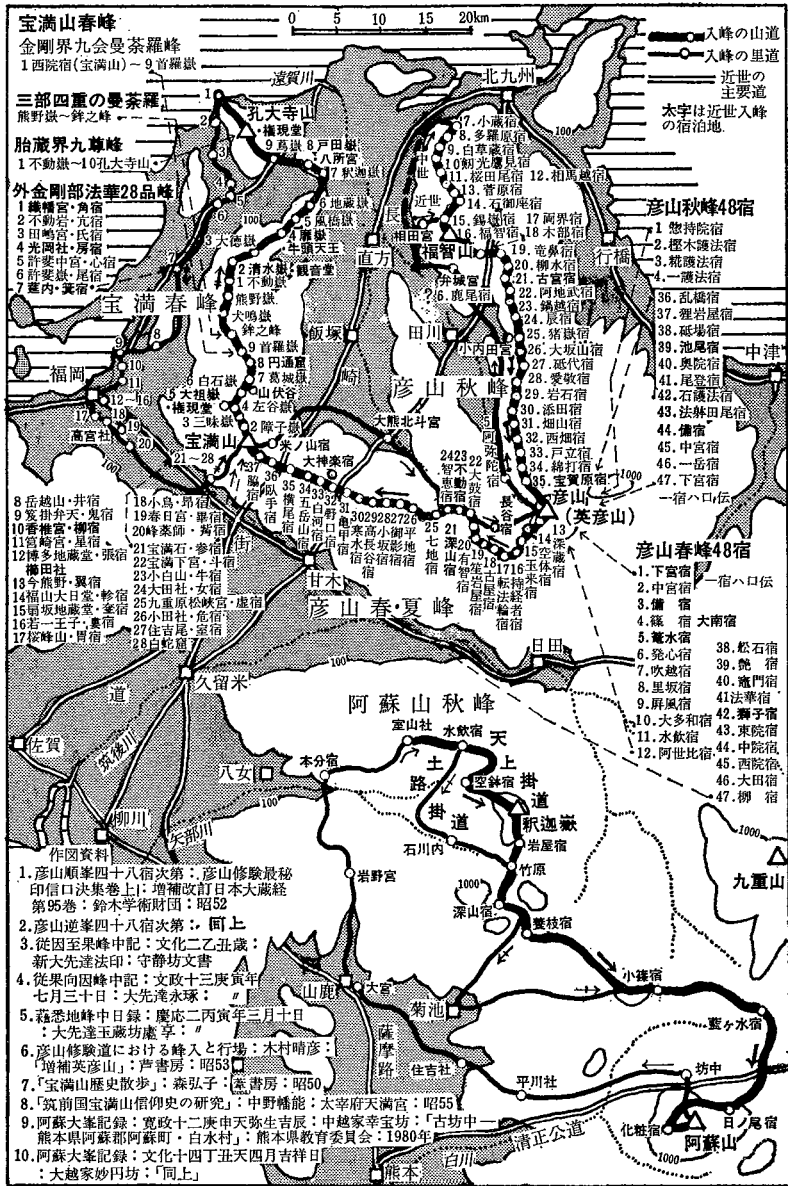


図3 彦山・宝満山・阿蘇山修験の入峰道推定図

ころ、所在の目印となり且つまた利用価値の多かった巨杉の育った場所などが実際に宿泊する「宿」として固定化されたと考えられる。杉は常緑の巨木となり霊の依代として聖域の環境を醸し出す。その葉は宿の床に敷き、枯葉や枝は薪となり、生葉は線香の原料ともなった。

図2・3は入峰道について最も記録の確かな大峰山や英彦山の宿を主体に示したが、それでもなお所在不明の宿がある。各地方の山地に入峰のコースを確めることは容易でないが、一九七八・九年の阿蘇山古坊中の調査で明らかに

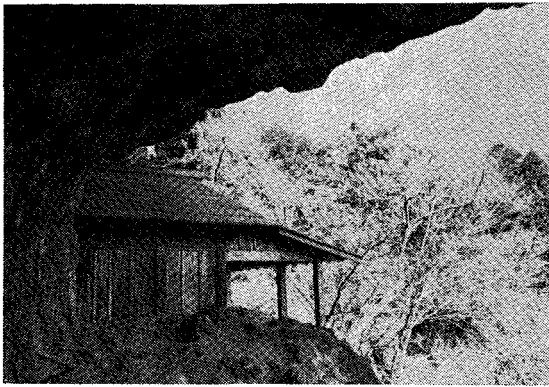
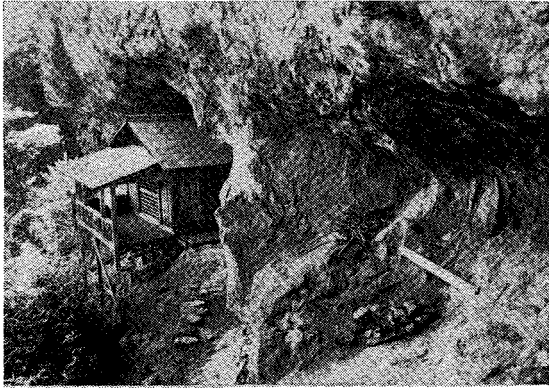


写真1 英彦山大南宿 (1980.3.19)

建暦3 (1213) 年の「彦山流記」によると、この窟は天養元 (1144) 年の頃、「先生の住侶」が造ると記してある。近世の入峰記録では新客・同宿の若山伏がここで山籠の間に断食を行っている。

された阿蘇修験による往復
二二〇キロに達する入峰の
コースを知るとき、藩の領
域を越えた思いもかけない
遠方の山岳と確かに入峰道
で結ばれていたことがわか
る。

(三) 宿と道の実態

宿を伴う入峰道は山伏集
団にとって不可欠の修行舞
台であったと同時に、修行
目的以外の俗人に使用され

た可能性にも注目したい。律令時代における中央政府と地方の国府を結ぶ、主として平野を通る交通路に駅馬・伝馬の制が施行されたにもかかわらず、道それ自体は貧弱であり、かつまた民衆はその制度の外に置かれたことはいうまでもない。万葉集の「家にあれば筥に盛る飯を草まくら、旅にしあれば椎の葉に盛る」の歌は、古代の旅の実態を想わせるが、平安時代の更級日記に、遠江国から三河国に入ったところで次のような文がある。「二むらの山の中に泊まりたる夜、大きな柿ノ木の下に庵を作りたれば、夜一夜、庵の上の柿落ちかかりたるを人々拾ひなどす」。このように上総国府から京へ上る地方官吏の父とその娘が通った官道でさえ、山中ともなれば「庵」すなわち小さな草壁の粗末な小屋が宿となっていた。入峰道の宿が大きな杉の下の庵であったり、岩窟に組みこまれた社堂⁷⁾であることは、時代を遡れば宿として普通の施設であったと思われる。つまり平野を主に通る官道や街道が、中世・近世と時代が下るにしたがって施設も進歩したのに対して、入峰道と宿は旧態を残したため粗末ではあるが、古代・中世においてはかなり利用価値をもった交通路ではなかったかと考えられる。

南北朝時代、争乱の特に激しい舞台となった畿内では、吉野から熊野に至る大峰山の入峰は遂行が困難となり、この機に地方修験の山に入峰が盛行するようになったといわれているが、争乱は地方にも波及しており、その影響を受けて天竜川流域では谷底平野を避け、「坂道を人の背に担われた物資は、秋葉山上の市で取引され、ここから秋葉修験の管理する尾根道を馬の背で峰々を要所の山坊を中継しながら、信濃諏訪への塩の道が確保された」⁽⁸⁾という。

寺社領荘園の多くが失われた近世に入ると、その失った経済的基盤を補う財源として、信者(檀越・檀那)の布施が重要なよりどころとなる。そこで山伏は修行の相間をみはからって山から里に下り積極的に護符などを配り、自坊に固定した檀那の獲得につとめると共に、山への登拝を勧誘した。一方、平野部では城下町や宿場町の形成、新田開

発の進展などで近世初期は人口も急増し、信仰と慰安を兼ねた山詣でが各地に盛んとなり、俗人も修行の道や山の宿を利用する機会が多くなったとみなされる。

元禄二（一六八九）年六月八日、出羽三山の月山に登拝した松尾芭蕉は、「おくのほそ道」に次のように記している。「息絶え身こいて頂上に到れば、日没して月頭る。笹を敷き、篠を枕として臥して明くる日を待つ。日出でて雲消ゆれば湯殿に下る」。これは行者道を俗人が登拝し、行者が山籠した月山の宿そのものを利用した記録であり、万葉時代から言われた草枕の状態がそのまま山の道と宿に残されていたことを物語る。そして当時四十五歳の芭蕉は、山道に不慣れであったことから、息も絶え絶えとなり、旧曆六月の夏というのに高山の寒さで身も凍るほどの思いをしたというのである。しかし元来山に生活する人、特に山で修行する人にとって、坂道や山の寒気に対する耐力は、平野を主体に生活する人が考えるほど苦にならなかったようである。梁塵秘抄の中に、「凄き山伏の好むものは、味気な凍てたる山の芋、山葵、粳米、水雫、沢には根芹とか」というのがある。

現在でも比叡山の回峰行者は、一日二食の精進粗食でありながら、急坂を上るのに汗を流さず、息はずませないことに驚かされる。行を始めて一カ月くらいたつと呼吸が整ってくるという⁽⁹⁾。比叡山に限らず全国各地にある山上の奥宮に奉仕する高齢の神職者が、山麓や山腹の集落から気軽に毎日上下する例は少なくない。また屋久島の原集落では、代参者が大忠岳へタケマイリの帰路、岩屋カスギなどの大樹の下に一泊するという⁽¹⁰⁾。古い山道には目的地に向かって最短コースで結ぶものが多い。その道沿いに雨よけ程度の宿があれば、山人や行人にとって、それは極めて有効な交通路であったといえよう。

では入峰と山人の接触を示す証拠はあるだろうか。入峰は修験道儀礼の中でも特に祕儀が多く記録は少ない。彦山

諸坊家に残る入峰日記をみて、宗教儀礼を主体に記し、重要な部分は「ロイ」(口伝)と記すだけで内容は判らない。まして入峰の行中における俗人との係わりなどは極めて資料に乏しい。その少ない中に次のような例がある。

①文化二(一八〇五)年三月十七日「此節者、山師入込居申ニ付、近道不行儀無之申附也」(11)。

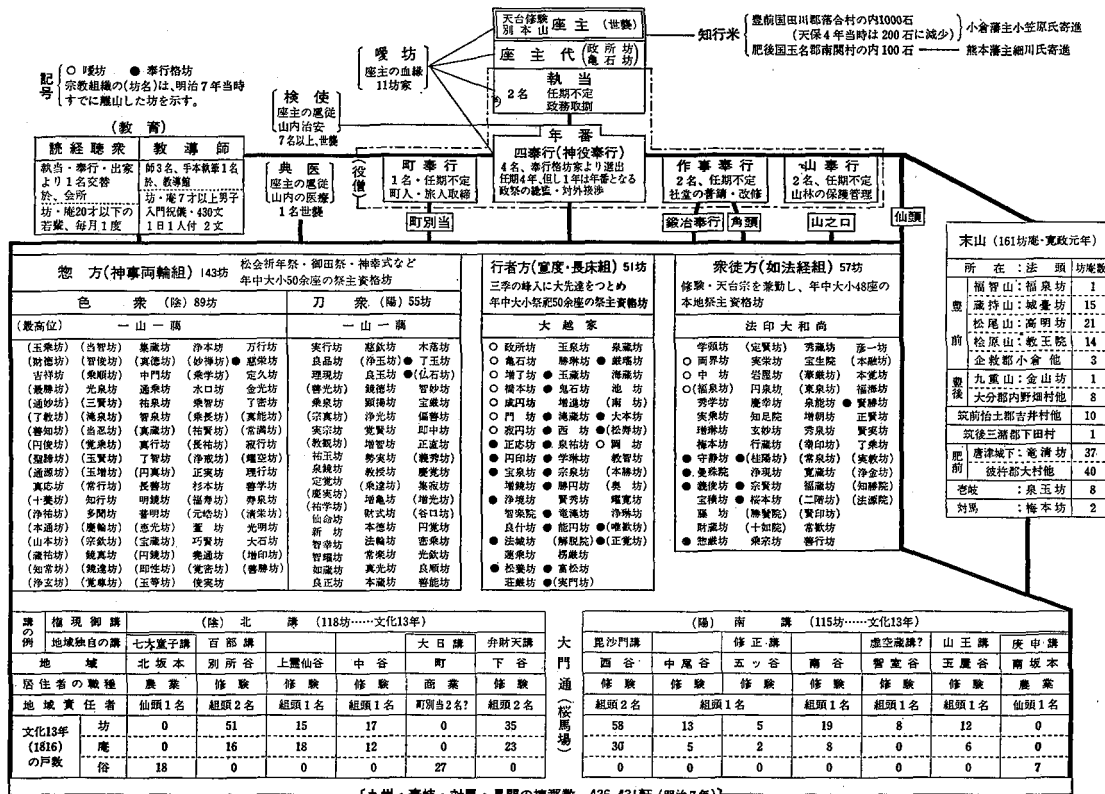
②同年四月四日「良瑞・喜市・貞右衛門、此人木地山人也、問有之別ニ記」。

③文政十三(一八三〇)年三月十六日「小石原皿山村へ前以テ今般彦山何坊入峰修行致スニ付、深山ノ宿へ着致候間、呼摩札進セ候…(略)…猶又樵父共宿ノ前通路不致ヨウ申附被下旨申遣ス」(12)。これらの記録から入峰の道筋一帯の山地は山師・木地師・樵夫などの生活圏であり、入峰の行われるとき以外はそれらの山人によって道や宿は利用されていたことが推察される。①は山師がどこで見ているかわからないので入峰の作法を粗略にしないようにという戒めであり、②は入峰の集団が木地山の人から歓迎の訪問を受けたことであるから修験と山人の共存関係を示している。なお、四国石鎚山で安永八(一七七九)年に鉄鎖を掛替えたとき、その勸化頭取に木地屋の名があり、この功勞で先達絵符が与えられた例もある(13)。③は入峰で宿を使っている間は樵夫たちに道筋の通行を遠慮するようにとの依頼である。換言すれば入峰以外のときは山人が修行の道や宿を使うこともあったということになる。

④江戸時代における彦山修験集団の構成を検討してみると(表1・図6)坊家の雑役や入峰にさいして強力(度衆)となる庵室・同宿とよばれる下級修験が多数いた。その出身地は彦山周辺の山村地域の人が多い。入峰における強力(度衆)の役割は後述(九四頁)の通りであり、山人は修験道それ自体を支える不可欠の存在であったと考えられる。

このように見てくると、入峰の道とは、実はその大部分は古くから存在した山人の道を逆に山伏が利用するようになって、宿などが定められたのではないかと思われてくる。冒頭に引用した法華験記の沙門義睿が、十日余を費し道

図4 修験道集落英彦山形成のメカニズム
 駒沢地理15号「山岳宗教(修験道)集落英彦山の構造と経済的基盤」(拙稿)による



[九州・巻越・対馬・奥門の檀那数、426,431軒(明治7年)]

69 日本の山地に形成された入峰道(行者道)の歴史地理的考察

する入峰道の一部を歩き、一部の山(特に山上ヶ岳)を登拝する形式に簡略化されている。また大先達や先達と称しても純粹の山伏ではなく、平素は一般の社会人として生活している人々がほとんどである。では俗人を交じえない山伏集団による入峰はどのように実施されたのであろうか。中世の形態を近世まで比較的によく伝えた資料のある英彦山の場合について検討を加えた。

(一) 行者系修験と仏教系・神道系修験の関係

図4は神仏分離以前の「天台修験別本山彦山派」⁽¹⁵⁾の宗教組織と自治組織を集落構成との関連において表現したものである。文化十三(一八一六)年の人別改⁽¹⁶⁾によると、坊家二三三軒——坊家の山伏は司祭権や自坊に所属する檀那を持った。庵室一一〇軒——司祭権や檀那を持たないが強力として祭礼や檀那廻りの助力をした。俗家五二軒——農商職人からなる。以上は江戸時代における英彦山の平均的な姿であった。この集落が豊前・豊後・筑前三国にまたがる英彦山(二二〇〇メートル)の豊前側(福岡県)中腹に門前町を形成し、入峰の拠点となっていた。しかし二百余坊の山伏が総て入峰を司る大先達とはなれなかった。すなわち山伏集団は図4に示した通り、三派に分かれていた。

第一は「行者方」(宣^せ度・長床組)、入峰の大先達となる家系で、自治組織や経済的地位も上層に属する坊家が多かった。文化十三年の人別帳では明らかにできないが、明治維新前後には五一坊存在した⁽¹⁷⁾。

第二は衆徒方(如法經・誕生会組)、天台系修験であり法華經の写經と納經を重視し、組織上の地位は中位に属する坊家が多かった。前者と同時期に五七坊存在した。

第三は惣方(神事両輪組)、神道系修験であり、色衆(陰)・刀衆(陽)に分かれて祈年神幸祭を担当した。組織上の地位は下層坊が多く、前者と同時期に一四三坊存在した。

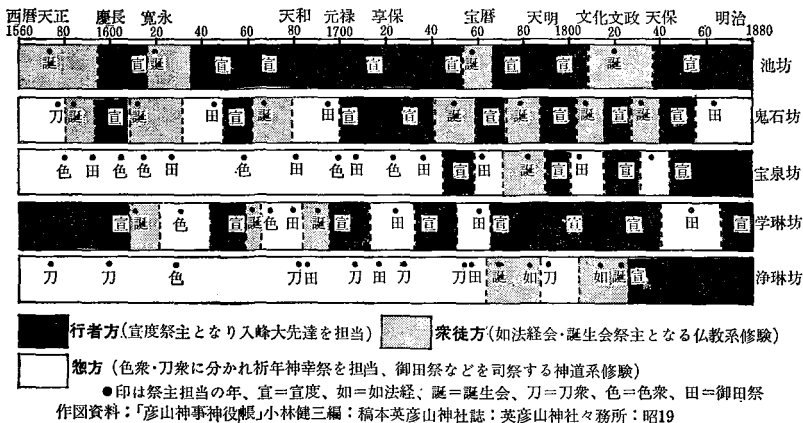


図5 英彦山坊家の神役担当の変動

これら三派に分属した山伏の家系は伝統を重視する修験道の特質から考えて原則的に世襲であったと思われるが、現実には天正二(一五七〇)年から明治二(一八六九)年に至る間に存在した延三六一坊のうち、三九%に当る一三九坊は所属を変更している¹⁸⁾その理由は経済的事情が関与しており、惣方から衆徒方・行者方へと転向を許可される家運隆盛型やその逆の場合も存在した。その実例として図5に所属の変動した五坊家の場合を示した。

三派の宗教上の分担は年間を通して多彩かつ連動的で誠に複雑であるが、二月十三日から十五日にかけて「松会」とよばれる彦山最大の祭事には見事に調和して五穀豊穡を祈る仕組であった。そのクライマックスである松会正日(十五日)の状況を略記すると、まず彦山靈仙寺大講堂(標高七〇〇メートル余)で早晨に仏教系修験の「衆徒方」による「涅槃会」がある。これは釈迦入滅の祥月命日に当たる法会であり、鎌倉時代には「舍利会」として行われていた¹⁹⁾。この法会は「舍利变成シテ米ト為ス」という修験道の理念に習合し²⁰⁾、已の中刻より講堂広庭では神道系修験の「惣方」による「御田祭」や各種の「験争い」などが行われた。その終了を待って行者方からは、本

表1 英彦山修験道の入峰構成(21)

年	文久4・元治1 (1864) 年				元治2・慶応1 (1865) 年			慶応2 (1866) 年	
	春 峰 (順峰・胎蔵界峰) ・従因向果峰)	夏 峰	秋 峰 (逆峰・金剛界峰) ・従果向因峰)	冬 峰	春 峰	夏 峰	秋 峰	春 峰	夏 峰 (華供峰・胎金不二峰) ・蘇悉地峰)
行先	英彦山 \leftarrow 宝満山		英彦山 \leftarrow 福智山					英彦山 \leftarrow 宝満山	
期間 月/日	駈入2/15~4/10出峰		駈入7/晦~9/10出峰					駈入3/10~4/19出峰	
先達	勅宣新度者 大先達法印 権大僧都 玉蔵坊虔亨26歳		藤次大先達 玉泉坊栄伝34歳 駈返大先達 玉蔵坊虔亨26歳					華供大先達法印 玉蔵坊虔亨28才 初先達 円印坊良馨22才	
同行 または 新客	宝泉坊当住了圓18歳 智耀坊当住春道17歳 池坊宿瑞玄20歳		玉泉坊当住恭城18才 善明坊当住瑞珍16才 常満坊当住智正21才 小倉教学院当住謙順42才 中門坊当住順栄16才 報恩院附弟文忠17才 宝善坊当住永正40才					耀寛坊当住栄真17才 肥前国大村公代峯 金剛院当住慈門18才 同国唐津呼子 妙泉坊当住法隆22才 同国唐津入野村 阿光坊当住右近24才 当山良品坊次男幸齋21才 " 幸印坊当住恭静26才	
度衆	良仙 養啓 貞信 玄城	良海 法円 妙観 永重	大進 素善 搜玄 観重	淳良 養啓 妙観 了円	素善 清定 寿貞 恭門	大晋 良仙 法淵		良仙 大超 了仙	良戒 大長 良海

日昇進したばかりの宣度大先達が、仏教系・神道系修験を包含する十五歳級の若山伏を引つれ、必死の修行を体験させて験力が得られるように、五十五日間にわたり、彦山から宝満山まで往復する胎藏界入峰(春峰)に駆入った。この松会三カ日には九州各地から数万の群衆が登拝し、五穀豊穰や招福除災の靈験を期待した。そして四月八日、釈尊誕生会が彦山大講堂で執行されている頃には入峰の集団も金剛界の宝満山を出峰し、十界修行(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・声聞・縁覚・菩薩・仏)を経験した即身成仏となって彦山へ一路里道を帰還するように春の入峰は仕組まれていた。

(二) 入峰集団の組織

英彦山修験道の三季の入峰がどのような構成で遂行されたか、幕末の例を表1に示した。当時、英彦山修験の中には諸国廻檀の特権を駆使して、尊皇攘夷派の長州藩の行動に加担する者があり、これを察知した佐幕派の小倉藩は文久三(一八六三)年十一月に、兵五〇〇人で英彦山を軍事占拠し、英彦山修験座主を小倉に長期間幽閉したり、幹部級の山伏を含む十三名が小倉に入牢(慶応二年に六名は処刑)、諸国への廻檀も差止めとなるなど極めて異常な事態であった。それにもかかわらず少人数ながらも入峰が確実に遂行されているところから考えると、かつて天正九(一五八一)年に豊後の切支丹大名大友氏が彦山焼打に来襲した時も、困苦を極めながら入峰を断絶することなく続けた姿勢に²²⁾、入峰修行が極めて根強い伝統に支えられた健たかさを証明している。

入峰それ自体の宗教的な内容は略するが、集団の統率は表2の「勅宣度大祭会座分」に示す数多くの宗教儀礼を遂行した「大先達」である。サブリーダーとしては彦山から宝満山を往復する春峰と夏峰には「初先達」翌年の春峰には大先達に昇進)が随行するが、彦山から福智山を往復する秋峰のときには、三季の入峰に大先達を経験している「藤

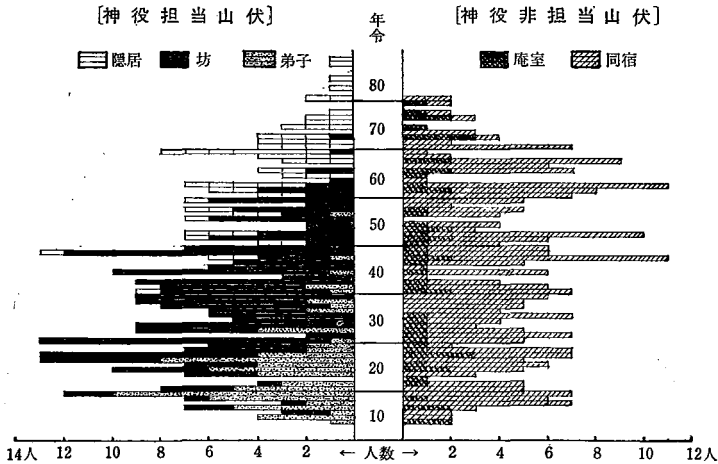


図6 彦彦山山伏の年齢構成（寛政元年・1789）

寛政元酉年彦彦山坊中並諸国末山人別帳写（九州大学九州文化史研究所蔵）
により作図

次大先達」が後見役としての地位で同伴している。これらの先達によって彦山派修験道の直伝を授かるのが「新客」や「同行」である。前者は入峰初参加、後者は体験者であるが、新客は十五歳—二十歳前半の年齢が多く、社会的には成人式、修験としては入門式ともなった。

以上の大先達・初先達および同行・新客を中心とする入峰の遂行を実質的に支えたのが「度衆」（強力）であった。度衆は俗人の出身が多い。図6に示した神役（祭祀）非担当の下級修験である「同宿」または「庵室」の中から入峰にさいして雇用された。同宿の場合、平素は坊家に同居して雑役をしているが、庵室は坊家から独立している。しかし固定した檀那を原則として所持せず、祭祀の準備、廻檀の随行、坊家の雑役或は職人（家根葺・石工・塗師・杣など）として生計を維持した。いずれも出身地は彦山周辺の山村が多かった。

では入峰にさいして度衆はどのような役割を果たしたであろうか、文久四年春峰の記録から拾ってみよう。なお以下

述べる㊦以外は例年の入峰に概ね共通している。

㊦ 入峰儀礼の助力

三月六日晴天、「到ニ丑刻、度衆ノ都合ヲ聞合、密ニ槃東ヲ附ル、時刻宜シキコロニ柴宿ヨリ合図アリ、予鳴ヲ密ニ打、直ニ入ニ断食ト高声ニ報ス」云々。これは英彦山大南宿（写真1）において、新客や同行に対して十界修行の餓鬼道を体験させるため、断食修行に入るとき度衆の助力を得て進行したことを示している。

㊧ 宿と入峰道の整備

二月十九日晴天、「供養法如例日課ヲ勤、今日備宿ヲ為ニ掃除、良海・大進・素善、法円・良仏、ヲモ棚入ノ品取ニ遣ス」。

三月十四日細雨、「先廻度衆ヨリ小石原代官エ行者堂ノ鍵、宿ノ鍵借用ノ事」云々。これらの記事によって、次の宿泊地に移る前には度衆を先に派遣して入峰集団の受入れ準備をしていたことがわかる。また他の年次日録には、予め入峰道の草切りなども必要に応じて行ったことを記してある。

㊨ 本山と行場の連絡

入峰の期間は長いため、この間にはいつでも自己の坊家や修験道組織上の役僧に連絡可能な体制をもって集団行動をとる必要があった。日記には連絡の度に帰坊した度衆名と、行場に宿泊した度衆名が記録してある。これはまた入峰が終了したとき、大先達から日當が支払われるための雇用メモとしての意味もあったと思われる。

㊩ 非常事態への対応

二月十九日晴天、「午ノ中刻……ヨリ出火、既ニ講堂モ無ニ覺束ニ様相見候ニ付、形箱、袈裟箱其ノ外用具ノ品相緘、

池ノ尾宿ニ相移……暫時ノ間六十軒モ焼失……北山御本尊・増慶上人尊躰ハ度衆奉テ池ノ尾ニ安置」云々。これは偶々春の入峰の最中に英彦山の門前町で大火災があり（今に至るまで山中火事と伝えている）、下宮宿に籠っていた入峰集團の一行は、火が迫ったため、秋の入峰に籠る池ノ尾宿へ急ぎ移動しているが、そのとき仏像・神像などを度衆が運んだことがわかる。この大火で英彦山中は大被害を生じたにもかかわらず、大先達や同行・新客は帰坊することもなく、専ら度衆が往復し、入峰は整然と遂行された。

以上のように不動明王の直体と観ずる大先達のもとに、行者方はもちろんのこと、神道系・仏教系修験の若山伏を中核とした入峰は、庵室・同宿と称せられた俗人（多くは山人）出身の下級修験によって支えられるところが大きかった。

(三) 入峰の財源

三季の入峰がいつ頃から行われたかは定かでないが文安二（一四四五）年の「彦山諸神役次第」⁽²³⁾には明記されている。しかし建暦三（一二一三）年の「彦山流記」では山内年中仏神事に入峰のことは全く見当らない。したがってその間に成立したとみなされよう。そして入峰が年中行事として定着したときには、それに伴う経費も相応に必要であったと考えられる。江戸時代初期の慶安四（一六五二）年から幕末の文久二（一八六二）年に至るまで、毎年一人、入峰の大先達に昇進する「宣度祭」^{（せんとさい）}に關係した一連の儀礼について、その施主件数を整理したのが表2である。六カ年にわたる儀礼の数々に、その司祭山伏となるには彦山座主へ上納金が必要であった。安政三（一八五六）年の祭主大蔵院が上納すべき合計金額は金九四両三步・銀一二七枚（八両余）・米四石八斗（七二〇キロ）。これを現在の標準米価に換算すると合計約四八八万円の高額になる⁽²⁴⁾。このような出費の財源はどこから得たであろうか。

表3 坊家の年間収支例 (当該坊家大福帳による)

坊名	年次	収入	全収に対する%			支出
			廻	檀	米客その他	
円印坊	安政3 (1856)年	37両3歩2朱	74	22	4	34両2歩1朱
守静坊	文久1 (1861)年	78両3朱	54	22	24	81両3歩2朱
勝円坊	慶応2 (1866)年	59両, 銀39匁 諸藩札銀55.2匁, 米4.5石, 麦6.8石, 雑穀1.9石	59	24	17	70両2歩, 銀69.6匁, 諸藩札113.7匁

㊦ 檀那廻りを主とする布施

近世における彦山山伏の基本的な財源は、九州・杵岐・対馬・周防・長門に分布する約四二万戸（明治七年調）と算定される檀那に配札して得る布施を主に、参詣者の宿泊費などの収入であった。彦山の坊家は江戸時代には二五〇坊前後であったから、一坊平均約一七〇〇戸の檀那を所持したことになる。ところが更に分析してみると、宣度祭を行い大先達に昇進可能な行者方は一坊平均四〇〇三戸の檀那を所持していたのに対して、衆徒方とよばれる仏教系山伏は平均一六一八軒、惣方とよばれる神道系山伏は平均一二〇〇軒というように格差が大きかった。つまり大先達となり得る家系は経済的基盤も強固な坊が多かったことになるが、それでも尚且つ家運に盛衰があつて、所属も行者方から衆徒方や惣方に転向したり、その逆の場合も多発していることは図5にも表現したところである。表3は比較的丹念に記載された大福帳から坊家の年間収支を例示したものであるが、この家計の中から多額な入峰に要する上納金を支出することは容易でない。したがつて別途に次のような収入の方法を考えねばならなかった。

㊦ 入峰に関連する施主

宣度祭によつて大先達に昇進し、三季の入峰を成就するまでには表2にあげた六カ年にわたる数多くの儀礼を遂行することが必要であるから、重要で上納金も

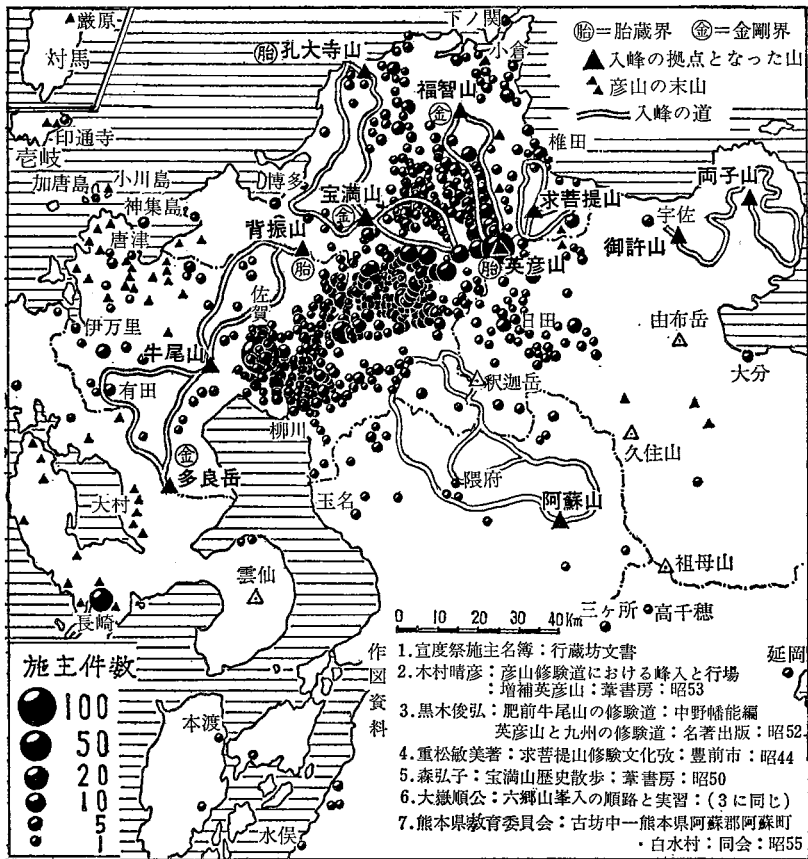


図7 英彦山宣度祭施主の分布，付 入峰道の概略

多額な儀礼には特別の奉賀を檀那に仰いだ。図7はその施主の分布を表わしたものである。生産力の豊かな穀倉筑紫平野と遠賀川流域の農家や、城下町佐賀、貿易港長崎の商人階級などに支えられるところが大きかった²⁸⁾。

また大先達になる家系以外からでも、入峰に参加するという名目で奉賀が得られたらしい。その一例として、表4は仏教系山伏の義俊坊道栄が天保年間に六カ年を費して入峰の奉賀を受けた実績を示しているが、おそらく新客か

表4 入峰奉賀の例(義俊坊道榮=衆徒方)

天保9(1838)年 の奉賀予定	米 18石2斗 9升8合	金子 12両2朱 90文
天保14(1843)年 までの奉賀実績	米 14石1斗 9升	金子 6両1歩 17文

天保9 戊戌9月吉日・入峰奉賀取立帖・守静坊文書による

同行としての入峰に参加したものとと思われる。

㊦ その他の収入

入峰を行う直前には大量の祈禱札などが用意された。弘化二(一八四五)年秋峰の記録²⁷では、只紙大札一〇〇、杉原大札一〇〇、小札八〇〇、掛守二一〇〇、護摩灰一五〇〇、伝札三五となつている。これらは村を通る場合や、人里に近い宿に泊るとき、加持祈禱を受けに人々が群集する。そのさいに配るものであり、これによって得た布施は合計二〇貫八〇〇文(三兩余、当年の一兩=錢六貫八〇〇文)であった。そのほかに新客や同行からの入峰参加の謝礼や親戚筋からの餞別などがあつたが金額の程度は詳らかでない。

修験道の最も代表的な修行が入峰であることから、それを遂行するに必要な経費は、最も布施の集まりやすい組織上の地位や方便が講じられていた。しかしそれでも尚且つ修行が形式化するほどに消費は多くなる。その有様は表2をみると江戸時代初期には比較的施主が少くない。これは山伏が独自で入峰関連の儀礼を遂行した姿勢の現われであり、幕末に向かうほど施主を仰ぐ儀礼が多くなつていくことがわかる。天保九(一八三八)年の借用証²⁸に次のようなものがある。「証文一、金貳両 右者此般左中弁入峰用ニ致借用候之処無相違候」云々。この借主は衆徒方の坊であるから大先達や初先達となるためのもではなく、新客か同行として、坊の弟子と思われる左中弁を参加させるための資金を借用したものであろう。

以上のことは近世における入峰の遂行が経済的な面から矛盾を生じていた側面を示すものであり、食糧をはじめ商品生産の手段に乏しかった全国の修験道の山岳にみられる入峰に共通した経済事情ではなかつたかと思われる。

あとがき

修験道は他の宗教に比べると記録に乏しいことや、明治維新の神仏分離令に続く修験宗廃止令などの影響で実態の把握しにくい宗教とされてきた。しかしその一方で山伏(修験)はどの宗教徒よりも積極的に支配階級や広範囲の庶民と接触し、聖なる山への登拝を誘った。その俗人との関係や山伏自身の世俗的な生活状態など、むしろ修験道の側面に関心をもち、特に九州英彦山^{ひこきん}について検討を重ねる過程の一端として入峰をとりあげた。ところが筑紫山地では英彦山・福智山・宝満山・背振山・多良岳などのそれぞれを中心とする山塊に、いずれも入峰の道があり、介在する平野の僅かな里道で結べば完全に入峰の道は連鎖する。筑後川を挟んで中部九州には阿蘇山を中心とする同様の道があることもわかってきた。そして彦山と阿蘇山や背振山との交流はすでに鎌倉時代初期の「彦山流記」の記事にもあったり、近世には九重山や耶馬溪の山道を介し阿蘇修験が彦山付近まで来ていた形跡がある。阿蘇からは南九州の高千穂や霧島修験との連繫も想定される。天保十二(一八四一)年、伊藤常足の著、太宰管内志の日向・大隅・薩摩の部には、その記事の出所に屢「彦山人」が出てくる。彦山や末派の山伏が辺境の事情をよく察知していたからであろう。東北地方から南九州に至るまで、各地の修験が拠点とした山の「入峰」を明らかにすることが出来れば、日本列島の山地を結ぶ「宿」を伴った「山の道」として位置づけることが可能ではなからうか。それは山岳信仰を母胎とした習合宗教として独自のものに修験道が発達する中で、古くからの「山人の道」に宿を伴なり「入峰道」が形成されたと推察される。そして数多く存在したに相違ない山人の道の中から、入峰の道として選択されたのはどのようなところであったか。修験道成立以前からの山岳信仰を物語る延喜式内社にみられる神体山の存在や、入本法に先立つ納

経遺跡や経筒出土の山岳との関連を考察しなければならぬが、その問題は今後の課題としておきたい。

本稿は、日本地理学会一九八〇年度春季学術大会、同年第二十三回歴史地理学会大会、同年第一回西日本山岳修験道学会で発表した内容を総括したものである。

注

- (1) 五来重、「修験道入門」角川書店・昭和五五年。山伏の修行や生活には、山人の原始形態の痕跡がいろいろあることを、山伏の窟ごもり、木食や断食の修行、毛皮の曳敷をつけて生殺を許されたしとしたことなど数多くの推察例がある。
- (2) この分野で最も詳細な最近の研究として次の著書がある。宮家準、「修験道儀礼の研究」・春秋社・昭和四六年。
- (3) 修験道を初めて体系的に日本史上に位置づけた次の著書による。和歌森太郎、「修験道史研究」・河出書房昭和十八年。
- (4) 柞木田龍善、「修験の山々」法蔵館・昭和五五年。大峰山の七十五麓を山人の道案内を頼りに探索しながら、四回に分けて延十五泊して昭和四十年に踏破を遂げた、数少ない記録が述べてある。
- (5) 「彦山靈仙寺境内大廻行守護神配立図」永徳三癸亥年（一三八三）三月十五日依旧本書之・英彦山神宮文書。これには毎日廻路と行中一度の大廻路の二通り記されている。
重松敏美、「求菩提山修験文化攷」（豊前市教育委員会・昭和四四年）によると、保延の初め（十二世紀）叡山から求菩提山にきた頼源によって千日行は始められ、毎年一人ずつ入行し、明治三年まで続いた。
- (6) 「古坊中」熊本県文化財調査報告第四九集・一九八〇・熊本県教育委員会。
- (7) 五来重、「修験道入門」によると、修験独特の洞窟内建築として「投入れ」型式と名付けてある。
- (8) 武井正引、「秋葉山の信仰」・山岳宗教史研究叢書9・名著出版・昭和五三年。
- (9) 昭和四五年に千日回峰行成就の比較山無動寺谷にある明王院の光永澄道阿闍梨師のもとで、昭和四四年五月三日現在、百日回峰行を修行中の横山照泰新行の談話。
- (10) 石飛一吉、「大隅諸島における山岳信仰からみた景観の構造」、大塚民俗学会「民俗学評論」第一七号・昭和四四年。
- (11) ①②ともに、文化二乙丑歳□□「從因至果峰中日録」勅宣年分度者 新大先達法印□□・守静坊文書。

- (12) 文政十三庚寅年「胎藏界峰中記」法印役永琢・守静坊文書。
- (13) 宮家準、「石鎚山の歴史」、山岳宗教史研究叢書12・名著出版昭和五四年。
- (14) 「役講」のうち大阪に本部のあるものは三郷・光明・京橋・岩・鳥毛・井筒、堺にあるものは五流・両郷、以上の八講である。本部には総長・副総長・會計・幹事があり、それらの人選は世襲・推薦・選挙など様々である。役講の下にある「細胞」には講元があり、役講の総長は講元の召集権をもっている。昭和五十年九月六日、山上ヶ岳桜本坊田中数市氏談。
- (15) 元禄九(一六九六)年、かねてより聖護院が彦山を末山と主張していたことに異議を申立て幕府に訴訟していたが、「先規より別山紛れ無し」との裁許を得た。「異論記」元禄十四(一七〇一)年、英彦山神宮文書。
- (16) 「文化十三(一八一六)丙子春 英彦山人別御改書付」七隈史料叢書六・福岡大学松下志朗編・昭和四六年。
- (17) 行者方・衆徒方・惣方の坊数は「社中旧職交名録」行蔵坊文書による。年次の記入はないが明治初年の記録と推察。
- (18) 「彦山神事神役帳」稿本英彦山神社誌・小林健三編・英彦山神社々務所・昭和十九年。
- (19) 「彦山流記」建保元年癸酉七月八日・英彦山神宮文書(七月八日は改元前の建暦三年であるから後世の写本)。
- (20) 「彦山峰中灌頂密蔵」永禄元戊午季夏六日・豊州彦山靈山寺南谷華蔵院住 権小僧都阿吸房則伝、日本大蔵経九三巻・修験道章疏収録。
- (21) 文久第四甲子年二月吉日「從因至果峰中日録」勅宣度者大先達法印度度享。元治改元子七月三十日「金剛界峰中日録」駈返大先達度亨。慶応二丙寅年三月十日「蘇悉地峰中日録」大先達玉蔵坊度享。玉蔵坊文書により作表。
- (22) 「塵壺集」法印瑞華院広延六十一歳拜草(写)・法城坊文書。
- (23) 「彦山諸神役次第」文安二乙丑年九月十八日書之・英彦山神宮文書。彦山の諸行事は涅槃會・誕生会のような仏會も、修験行事の入峰も、屢「神事」と表現されている。
- (24) 安政三(一八五六)年、英彦山の米価一石(一五〇キロ)〓七、五〇〇文。両替相場、金一両〓七、二〇〇文。銀一枚〓四、三匁 銀一匁〓一一文。一九七九年の平均標準米価格一〇キロ〓三、一四〇円として換算。
- (25) 「山岳宗教(修験道)集落英彦山の構造と経済的基盤」拙稿、駒沢地理一五号、一九七九年。
- (26) 「彦山の信仰圏と祭儀施主」拙稿、「増補英彦山」葦書房・昭和五三年。
- (27) 「從果向因峰日録」弘化二乙巳紀七月三十日、藤次大先達法印円印良容、守静坊文書。
- (28) 「貸付金不埒ニ相成居候証文綴」守静坊文書。